
バルガス＝リョサ『**緑の家**』 岩波文庫 2010 年

バルガス＝リョサ(1936-2025)

今回は『緑の家 上』まで

◎作品のつくりの特徴

この物語の特徴として、以下の点に気づく。

●登場人物がひとつの名称で呼ばれていない。

軍曹がリトゥーマだとわかるのは、p.261でラ・チュンガに「軍曹じゃないの?」と呼ばれたときにはじめてわかる。また、行政官ドン・ファビオはファビオ・クエスタ、ドン・フリオは、フリオ・レアテギなど、同一人物かどうか、判然としにくいかもしれない。また、アキリーノは同一名称で、フシーアと話しているアキリーノと、船頭ニエベスの一番上の子のアキリーノの二人が登場する。

●化石を掘り出すように

それぞれの章、節が、ひとつの時間の流れや、場面の連続としてではなく、ばらばらに配置されている。読み進めながら、それぞれの場面が、それまでに読んできたどの場面と対応し、またどういった時間的な順序関係にあるのかを推理しながら、読んでいった。

このばらばらの配置を読み進めることは、たとえば、恐竜の化石発掘や、古代人の遺跡発掘で、化石や遺物がかならずしも年代別に掘り出されるのではなく、ばらばらのまま出土するのに似ている。それは掘り出された後から、組み合わせを推測していくほかない。

物語を容易には俯瞰できない仕掛けになっている。

読者は自分がいま、どこにいるのか、わからない感覚を強いられる。(地図の現在地を、つど書き換えながら読み進める) 読者は物語の内側から、物語を理解することを促される。(ハン・ガンが『少年が来る』を紡いでいった過程とはこのようなものではなかったか。本書では読者がそれを読書によって、体験している)

➡カルロ・ロヴェッリ『時間は存在しない』(NHK 出版)を想起

私たちはニュートンの時間、近代の時間に習慣づけられてしまっているため戸惑うが、『時間は存在しない』で描かれていたのは、「この世界は出来事でできている」ということだった。(96頁)『緑の家』では、いわばこの複数の出来事をジャンプしながら、読み進める。

●異なる時間、空間がそれと明示されずに、自然につなが合わされる

たとえば、45頁。フシーアとアキリーノの会話が、その会話で想起されている場面に、符牒なしに、接合される。

「その話は島を出る時に聞いたよ、フシーア」とアキリーノが言った。「わたしが聞きたいのは、あん

たがどうやって脱獄したかってことなんだ。」

「この合鍵を使うんだ」とチャンゴが言った。

読者はここで、フシーアとアキリーノの会話に、チャンゴという、フシーアの脱獄時にともにいた者の発言が挿入され戸惑う。過去の時間が、現在と同時に進み始めるように感じられる。

端的に、思い出すという行為は、現在進行形であるということを想起させる。

また、113頁。ボニファシアと、尼僧院長が話す場面に、想起されている場面が接合される。

「(略)あの子たちにこちらの気持ちが通じないのは仕方ありません。でもあなたにはそれが分かっているはずですよ、ボニファシア。」

「ええ、分かっています。でも、あの子たちがかわいそうで」とボニファシアは言った。「どうしようもなかったのです、院長様」

ボニファシアは跪いて、ランプで袋のところを照らす。二人の少女はウナギのようにからみ合ってそこに隠れている。

特徴的なのは、この異なる場所、時間への場面転換が、それと明示されずに自然につなが合わされていることで、むしろ作者は、そもそも思い出すというのは、このように、過去と現在が連続したものだということを示しているようにみえる。過去は思い出しているときに、存在しはじめる。事物の表裏を同時に見ているように感覚される。あるいは、現在というのは、さまざまな時間が錯綜した厚みをもっていることを示す。

◎物語について

●「悪魔」という言葉

56頁 ガルシーア神父が緑の家を形容して「悪魔、いまいましいペテン師」という

69頁 ボニファシアに向かって、シスター・アンヘリカが、「あなたは悪魔です。」という

101頁 ボスは悪魔だ。と、不正を糾弾する言葉をフムにいう

302頁 フリオ・レアテギに向かって今度はフムがお前は悪魔だ、という。

相手の不正を糾弾する言葉を、相手から教えられているという抵抗

●教師について

教師という言葉がそれと意図せず、含みのある概念をもつ言葉だと気づく。教師とは、他でもなく布教師のことだった。それは子どもを教化するのだ。

植民地の物語で、植民者は原住民を欺き、詐取し、一方で教化の大義名分のもとに、野蛮を文明化する。この野蛮と文明化のあいだ、いずれからもこぼれおちたところに、「あの建物はまるで生き物のように膨張し、成長」する(184頁)、娼館『緑の家』は位置し、文明化のなかで生じた理不尽さに翻弄される人々が描かれている、と読み進めている。

78頁にイエズス会士とあり、対抗宗教改革による入植地。

152頁には、「広場にあるカピローナの木に、異教徒のインディオを吊るしたというのは本当なんですか？」とボニファシアが尋ねた。「髪の毛を切って、頭をまっ白にしたという話ですけど。」と、シスターに詰め寄る場面がある。

一方で、軍曹の葛藤は、入植の理不尽さが、罪悪感となって個人に内面化されているさまを伝える。229頁で、軍曹は次のようにいう。

「要するに、おれはあの子たちがかわいそうなんだよ」と軍曹が言った。「伝道所に連れていかれる女の子がね。自分たちの仲間から離れたところで暮らすんだ、嬉しいはずがないだろう。それに比べれば、どんなにひどい暮らしをしていたって、ほかの子供のほうがまだしあわせだ。」

つつじ読書会の課題図書にひきつけば、このような葛藤は、ガルシア＝マルケス(1927-2024)『百年の孤独』にも描かれていた。また、この延長に、トミー・オレンジ(1982-)『パウワウ』が位置している、といえる。

〔教師について〕

(緑の家)

先住民の暮らしを脅かしていたとしても、宣教師はキリスト教を信仰し、伝道所では、その教えに敬虔な信徒として、子どもたちを教化している。しかしいまそのことに、疑問を抱き始めている

(現代)

グローバル・サウスや他国を武力や資本によって侵犯したとしても、教師は国家や資本主義を信用し、学校では、その社会に従順な生徒として、子どもたちを教化している。しかしいまそのことに、疑問を抱き始めている